

「特別支援教育の歩み」

2007年9月、私は特別支援教育非常勤講師として横浜市立小学校でのブレインジム実践を開始しました。2001年3月に公立小学校を退職して以来、6年半振りの学校でした。自分のアトリエでは子ども達と関わっていましたが、公立学校での児童との対面は、私に新たなエネルギーを与えてくれました。全と個。教育にはどちらも必要なことです。校庭で朝会体形に整然と並び、初対面の私に真摯に向き合う子ども達。久方振りに全校児童へ話す機会となった私は、出会いの喜びを語りました。P A C E実践の始まりです。登校日は校内巡回から観察を始めます。1階から4階まで校舎内を巡り、先生方や子ども達と言葉を交わしながら歩くだけで、その日の学校の様子を直観できるのでした。子ども達もそれぞれの状態により、近づいてくる子、視覚に入らずに通り返っていく子、長い間おしゃべりをした

い子等々。担任の先生との短時間の会話も児童指導のための貴重な情報となりました。この学校は10年間の勤務でしたので、先生方と子ども達の織り成す学校の変化や、地域の教育力を実感する機会となり、私の大きな財産になっています。初年度、保健室には、保健室登校の児童が数名いました。学年はさまざまでしたが、児童の個性により、私は3年生の担当を中心に指導を受け持つことになりました。その中で、人間の成長のすばらしさとブレインジムの力を、如実に見せられた事例を紹介します。担任は経験2年目の女性の先生です。ギャングエイジ真盛りの児童を担当として把握できない状態でした。その日も学級集団から離れているTくんに声をかけてから、「大人なんて、みな嘘つき」と怒る彼を特別教室に誘いました。教室の机が並んでいる

堀 弘子 (神奈川県)

間を自由に歩きながら、P A C Eを教えたのです。その後、シルクのスカーフを二人で持ち、呼吸を整える動きをしていた時のことです。Tくんから、「堀先生のことは信じる」という言葉が返ってきたのです。それからの彼は一変しました。彼の持っている力が開花していったのです。時を置いて学級へ行った折りのことでした。彼はリコーダーを吹いていました。泣く子に関わっていた私を見ていた彼がぼつりと一言。「俺、助けられたんだよね」と。そこには、著しく成長したTくんがいました。



グレニス・レッドビーター講師の講座が開催されました

DDPTTを受講して

ダブルドワードル・プレイ ティーチャーズトレーニング

皆さま初めまして。八王子で保育士をしながらBGインストラクターとして活動している遠藤由美子と申します。1月のグレニス先生のDDP(1日)とDDPTT(2日間)に参加しました。ところで、私の母は両利きです。文字と箸は右手に直されたそうです。でも、彼女の左手は納得いかず、はさみ・包丁は左優位です。なので、両方の手で文字を書くことができます。そんな母は、物事にほぼ動じません。「そんなの今更騒いだってしょうがないでしょ」と何かと肝が据わっているのです。DDPを知ったとき、両利きの母の性格に納得しました。母は知らぬ間に脳の統合に良い体の使い方をしていたようです。母をみて、やっぱりDDPがもたらす恩恵は大きいのだなと思い、思い切ってDDPTTに参加することを決めたのです。



また、この3日間で「DDPはただの両手お絵かきじゃない!」ということ体感しました。グレニス先生は「これは傑作を作ることが目的ではないのです」と言いました。それは絵を描くことがあまりない方々にも気楽さをもたらします。私は保育士なので、絵は割と身近にあるものですが、自分の“描きたいもの”を画用紙の上に表現し、しかも両手を使ってやったことはありません。またDDPで知る表現技法は、私の頭の中を柔らかくします。感じたことを指先でダイレクトに表現し続けた3日間。左手の存在感が確実に上がり、新しい手段で表現をし続けたので、感覚が研ぎ澄まされました。単に左手が目覚めるだけの話ではなかったのです。DDPには自由さがあります。子どもから大人まで、ブレインジムの導入編として幅広く使える予感です。現在、提出課題の準備も楽しみながら取り組んでいます。グレニス先生から溢れるDDPへの愛情も大きなギフトでした。協会の皆さま、このような機会をくださり、ありがとうございました!

遠藤 由美子 (東京都)

ブレインジムと私②

このシリーズは、インタビュー形式での連載となります。ブレインジムとの出会いや活動を皆さんに熱く語っていただこうと思います。

『ブレインジムで子ども達を笑顔に』

Q) 黒田さんのブレインジムとの出会いは?

私は京都市立の特別支援学校高等部、中学校特別支援学級、中学校LD等通級指導教室(以下L通)を経て、3年前に定年退職しました。ブレインジムとの出会いは、定年1年前に養護教諭の先生から誘われて、市内で行われる体験会に参加したことです。中学校の保健体育の教諭として採用されましたが、知的障害や発達障害のある子ども達を担当するうちに、障害児教育を勉強しようと特別支援学校教諭の免許を取り、臨床発達心理士・自閉症スペクトラム支援士・特別支援教育士の資格を取り、学びを深めました。しかし、実際の生徒への指導や支援や教材作成は、教師の創意工夫に任されます。私は、一人ひとりの子どもに応じた指導や支援については一定の成果をあげることができましたが、「頑張れ!」「ここまでやりなさい」など、メンタル面への負荷も相当かけてきたように思います。私は、モチベーションの下がっている子や人間関係に苦しんでいる子が、紙風船や卓球やバランスボール等、身体を動かすと土色をしていた顔色がバラ色に変わり笑みが出てくることを経験的に実感していました。ブレインジムは、教師生活37年目にしてやっと出会えた、最適な学びの方法だと思いました。ブレインジムのことをもっと知りたい、新しい職場の子ども達にもきっと役に立つと、その後インストラクターの資格を取得しました。

Q) 現在はどんな活動をされているのでしょうか?

現在は、私立女子中学高等学校の教育相談室の教員兼臨床発達心理士として勤めながら、自宅で「ブレインジムハッピールームJ」という教室を細々と営んでいます。

黒田 純子さん (京都府)

勤務する学校では、生徒や先生の個別の相談にブレインジムを取り入れています。ブレインジムのバランス調整をすることで、笑顔になる生徒や頑張り過ぎからリラックスする先生など、その変化に嬉しくなります。また、高校1年生の総合的な学習の時間にもブレインジムの授業を行いました。ハッピールームJでは、スクールカウンセラーやL通の先生を対象に体験会や公式講座(まだ1回)、教職員研修会等をご希望に合わせて行っています。

Q) 将来の展望は?

現在行っているブレインジムの活動が口コミで広がり、インストラクターとして、たくさん子ども達を笑顔にできれば嬉しいです。

Q) ブレインジムへの思いについてひとこと。

ブレインジムは子ども達だけでなく、支援者である保護者や教師のバランス調整にもとっても有効です。私自身、ブレインジムを始めて、「～しなければならぬ」から心が解放されました。写真はフィリピンの先住民アエタ族のコミュニティで、子ども達の似顔絵をダブルドワードルで描いている私です。言葉を超えた笑顔ももらいました。



15期ブレインジム・ティーチャープラクティカムが開かれました

『BGTPに参加して』

2018年2月、念願のBGTPに参加することができました。2010年に101を受けてからコツコツと学びと実践を続け、やっとここまで来ることができたというのが実感でした。会場の湘南国際村センター周辺は美しく、大学や企業の研修施設などがあり、自然も豊かなところ。散歩をしていると、タヌキがお出迎えしてくれました。講座のスタートに、その美しい自然とアートを体験させていただく時間がありました。一瞬にしてペースされ、この学びに引き込まれました。これぞ、ブレインジムと感じました。講座の内容は、「ここは説明が難しいよな」というところにフォーカスして組み立ててくださっていると感じました。また、田村先生はじめ3人の魔法使いのようなファカルティーの先生方が、受講生のニーズを理解し、真摯にきめ細かく向き合ってくださいっていると感じました。

浦田 健吾 (愛知県)

合宿講座は、プレゼン実習が数回あり、気力と体力は確かに要りましたが、このブレインジムという大きな学びの中にあることで、すべてが気づきのプロセスだと気づくことができます。

4日目には、庭園から海の向こう側に美しく広がる富士の絶景を見ることができました。今、この富士山を思い出すと、講座のシーンと、先生方が伝えてくださったもの、同期の皆さんにいただいた支えと学びがよみがえってきます。本当にありがとうございました。今、ブレインジムという気づきと豊かな体験の世界をお伝えすることに喜びを感じています。

